安曇野辰スポット

市内の辰（龍）にちなんだ場所を紹介します。

1 泉福寺薬師堂の龍

●明科南陸郷五九一三番地

本堂と薬師堂は市指定文化財になっています。本堂から急峻な階段を登ったところにある薬師堂には一八〇八（文化五）年に彫られた立川流作の見事な龍の彫刻があります。勇壮な姿は必見です。

2 《漆屏風 星空交響詩》安曇野髙橋節郎記念美術館

●穂高北穂高四〇八番地一

故郷安曇野の星空、山々などの自然を壮大かつ幻想的に「漆」の黒と「金」で表現した文化勲章受章者・髙橋節郎。《漆屏風 星空交響詩》には、ダイナミックに飛翔する龍が描かれています。

3 有明山神社裕明門の龍

●穂高有明七二七一番地

日光東照宮の陽明門にならい、信濃日光裕明門と言われ、大小二体の龍を見ることができます。二人の彫刻師が腕を競ったと言われています。裕明門及びその近くにある手水舎は市指定文化財です。

4 宗林寺鐘楼の龍の天井絵

●明科光一〇八番地

山門は市指定文化財に指定されており、上部には鐘楼が吊るされています。江戸末期に活躍した狩野派の絵師狩野梅玄が描いた巨大な龍。勢いとその大きさに圧倒されます。

安曇野に伝わる民話

泉小太郎（いずみこたろう）

むかしむかし、松本、安曇の平は山々のさわから落ちる水をたたえた湖でした。そして、ここに犀龍（さいりゅう）という者が住んでいました。

また、ここから東の高梨（今の須坂市高梨あたり）というところの池には、白竜王という者が住んでおり、やがて鉢伏山（はちぶせやま）というところで、二人の間に男の子が生まれました。

日光泉小太郎と名づけられた男の子は、放光寺山（今の松本市城山）あたりでりっぱに成長しました。泉小太郎が大きくなるにつれて、母の犀龍は自分のすがたをはずかしく思い、湖のそこにかくれてしまいました。

小太郎は、こいしい母の行方をたずね回り、熊倉下田の奥の尾入沢（今の松本市島内平瀬と田沢のさかいのあたり）で、やっとめぐりあうことができたのです。

5 穂高神社の日光泉小太郎

●穂高六〇七九番地地

母・犀龍にまたがる日光泉小太郎像。戦後の安曇野の美術界をけん引した芸術家の一人、小林章の作品です。

母の犀龍は、小太郎にしずかに語ってきかせました。「私は、本当は諏訪大明神の化身なんですよ。氏子を栄えさせようとすがたをかえているのです。おまえは、この湖をつきやぶって水を落とし、人の住める平地をつくるのです。さあ、わたしの背中に乗りなさい」

言われて小太郎は、母犀龍の背中に乗りました。この地は今も犀乗沢（さいのりざわ）とよばれています。二人は、山清路（今の東筑摩郡生坂村山清路）の巨岩をつきやぶり、さらに下流の水内の橋の下（今の長野市信州新町久米路橋あたり）の岩山をつきやぶり、千曲川の川すじから越後（新潟県）の海まで乗りこんで行きました。

こうして、安曇平の広大な土地ができたのです。そして、小太郎と母犀龍が通った犀乗沢から千曲川と落ち合うところまでを、犀川とよぶようになりました。その後、小太郎は有明の里（今の北安曇郡池田町十日市場）でくらし、子孫は大いに栄えたといいます。

（出典）長野県ホームページより

6 西村商店の「明科小太郎」

●明科中川手四〇〇八番地一

先代から作り続けている焼き饅頭「明科小太郎」。包み紙は泉小太郎をモチーフにしたデザインで、白餡とこし餡の2種類の味が楽しめるお茶うけにピッタリの饅頭です。

7 小林製菓の「小太郎の詩」

●豊科四四七六番地

安曇野創成の物語「泉小太郎伝説」に込められた想いを焼き菓子にした「小太郎の詩」。濃厚なチーズクリームの入った人気のダックワーズです。